

特別審査員講評

アナウンス部門：後藤 理様

今回アナウンス部門の審査に参加して、皆さんのレベルの高さに感心しました。校内放送で伝える内容をよく調べて、取材して、短い文によくまとめていました。審査する立場としては、どこに差をつけて点数を付けるか難しかったです。基本的に声がよく出ていました。遠くまでよく届いていました。皆さんの表情からは真剣さが伝わってきました。文を考え抜いて、それを伝えるために何度も読む練習をしてきたことが、よく分かりました。

今後のアドバイスとしては、ぜひ「読む」から「話す」へ気持ちを切り替えてみてください。心がけを変えることで、持ち前の声の良さも生きてくると思います。読んでいる時と話すときの姿は意外と違うものです。実際に自分の姿を思い浮かべると、その違いが見えてくると思います。ぜひ「話す」姿に「読む」姿を近づけてみてください。かなり伝える感覚が身についてくると思います。応援しています。

朗読部門：秋元 紀子様

お疲れ様でした。今日のこの日までドキドキだったことでしょうか。審査後の会場講評とは違うこと、普段の稽古のことについてお伝えしたいと思います。

心が1番大切なので、感動するものに多く触れてください。心を豊かにすれば表現も豊かになります。次に身体・筋肉を意識してみてください。心が変わると自然と筋肉が変わるはずです。片足を上げた時に使う筋肉が声を支える筋肉となります。階段の時は少し高く足を上げてみてください。

心と身体が決まって、初めて声が決まります。声が最後です。だから声から始めないでください。頭に思いつき、イメージができるから、人に話せるのであって、頭に何も無いのに話し出す人はいません。話したいことがあって話し出すのです。だから、どう読むか、どう読むのが正しいとか、読み方から決めないで欲しいのです。でないと単なる音の羅列になってしまいます。そしてあなたがその話をどう感じ、どう伝えたいかがとっても大切だと思います。そこに、あなたにしか読めない朗読があると思います。

皆さん、ますます素敵なあなたの朗読を！期待しています。

朗読部門：大下 恵先生

高校はレベルが高く、良い勉強になりました。

ラジオドラマ・研究発表部門：倉林 由男様

音の世界は面白いです。

録音とナレーション（音とことばで）人の心の中に入っていき、聞き手を現場へ連れて行く。自分たちの伝えたいことを、直接聞き手の心に伝えることができます。しかも、比較的やりやすい。伝えたいことが伝わったその先には、「感動」を呼び起こすこともできます。

このラジオドキュメント部門と総文祭の AP 部門は音と言葉を大事にした世界です。これからもぜひ挑戦してください。

レベルは上がりました。どうぞ伝えることの喜び、伝わったことの喜びを噛み締めてください。

ラジオドラマ・研究発表部門：町田 義広先生

高校生らしい身近なテーマを題材にしている、聞いていて“なるほど”と思えることが多かったと思います。高校生の立場で考え、伝えることが大切で、それが聞く側（同じ高校生）にしっかりと伝わるのではないかと思います。

ドキュメント・番組を制作するに当たって「何を伝えたいのか」それがとても大切です。制作しているうちに分からなくなってしまうときがありますが、その時は「何を伝えたいのか」に戻ると良いのではないのでしょうか。

テレビドキュメント部門：秋山 発様

撮影や編集の技術が平均として上がっていることを感じました。高校生活での身近な話題、友人のことなど、等身大の題材を選んだ企画が多かったことに好感を持ちました。そこから取材や企画をスタートさせ、多くの人にどんなメッセージを伝えるか、深く考えることが、大切だと思います。普段から自分たちの日々の生活の周囲で起こることをよくみて、ぜひ企画の種を探してみてください。

テレビドキュメント部門：山村 泰弘先生

過去、数回高校生の N コンの県予選の審査に関わってきました。今回、テレビドキュメント部門を審査し、全体的にレベルが上がり非常に驚いています。映像の撮り方などは本当に上手になったと思います。

映像でインタビューを取るとき、場所、機材、アングル等、色々な要素を踏まえた上で、インタビューを取ることが大事かな、と思いました。

インタビューをどう撮るか練習しても良いでしょう。

番組、アナウンス、朗読など放送では何を伝えたいのか。”伝える”ということをしっかり考えて取り組んでみましょう。

ラジオドラマ部門：東海林 桂様

音だけで何かを伝えるのは大変難しいことです。しかし、ラジオドラマの脚本や演出ができれば、テレビや映画にも使えるテクニックが身につきます。

今年は、実力の差が大きくなっていると感じました。

ラジオドラマ部門：熊本 丈力先生

今日も、高校生らしい作品を聞かせていただきありがとうございました。

さらに素晴らしい作品を作るために大事なことを申し上げます、常に聞き手を意識すること。テーマをどうするか、何を伝えたいか。そして、脚本作り、編集の過程など、音量バランス、間など、部員同士でお互いにチェックできると良いですね。

番組ということでは、最初のオープニングでいかに状況を提示するか、また主人公に感情移入できるようなセリフ、場面設定が大事だと思います。

番組作りは大変かと思いますが、作品としてずっと残るものです。これからも高校時代の記録として、数多く作品を作って下さい。

テレビドラマ部門：北川 敬一様

<カッコイイ！について>

14本のテレビドラマを審査していて、今回も楽しかったです。エントリーした高校生のみなさま、ありがとうございました。そして、お疲れ様でした。

撮影場所、芝居、カメラ、編集など、いろいろな点で全体的なレベルが上がっていると感じました。

企画意図のなかに、「嫉妬」「人との距離感」「高校生らしさ」「将来の夢」などがありました。伝えたいことはあっても、数分間ではなかなか伝えることが難しいことにチャレンジしたことを、評価したいと思います。

ナレーションやテロップや言葉（セリフ）で、説明せずに、まとめてしまわないところが、映像のカッコイイ！ところだと思います。失敗してもいいから、また、カッコイイ！を見せて下さい。

映像づくりは、大変だけどやっぱり面白いですよ。